

Message

未来に残すもの



(社) 全国上下水道コンサルタント協会
会長

清水 慧

Simizu Satoshi

昨年11月3日、文化の日に行われる入間基地航空祭のアクロバット飛行を久しぶりに見に行きました。航空祭の日は、ふだん立ち入り禁止になっている滑走路前方の空き地が開放され、間近に離陸と編隊飛行を見ることが出来ます。ダイヤモンドテイクオフ（4機がダイヤ型に密着した状態での離陸）で始まり、レインフォール（上空から5機が垂直に降下してひろがる）などいろいろなアクロバット飛行が見られます。以前はカラー噴射していましたが、最近では、洗濯物が汚れるとの苦情があるとかで白い噴射だけです。軍国少年でなくとも、青空を背景に飛ぶ戦闘機（飛んでるのはT-4練習機ですが）の姿は、まさに「カッコいい」ものです。

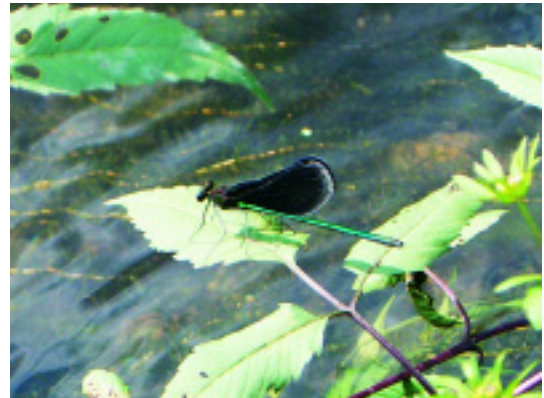
戦闘機では、機体、部品の素材や加工技術から通信、探知能力などのソフト技術にいたるまで、その時代その時代の科学・技術の粋を結集し、最高の性能を維持していると思われまふ。それ故、次々と新しい機種に取って代わられ、その寿命は短いのではないかと思ひます。戦闘機だけではなく、近代になって作られた物の多くは、寿命が短いような気がします。

それに引き換え、洋の東西を問わず、古代に作られたものは、1000年、2000年を経て、いまだに使用されたり、我々を感動させたりしている物があります。もちろん古代に作られたものもほとんどは消えているのかもしれない。しかし、科学・技術の時代と言われ

る20世紀に出来たもので、これから1000年、2000年後に残るものはあるのでしょうか。日頃から我々がお世話になっている記録媒体も、20年前の記録ですら、専用のハードがなければ読み取ることが出来ません。和紙に墨で書かれた記録は1000年前の記録もいまだに読めますし、法隆寺など国宝となっている木造建築物は、解体修理は施されているものの、数百年以上の風雪に耐えています。

自らを「渡り大工」と称し、日本各地の古代や中世の木造建築物の修理に携わってきた松浦昭次さんによりますと、室町時代になり、大鋸という道具の進歩がそれ以後の木造建築物を弱いものにしていくことです。大鋸が使用される以前は、木材は「割る」ことによっていろいろな部材を作り出したそうです。「割る」ことで木の目を活かさざるを得ない。木の目を生かすことで数百年間、山での風雪に耐えた木が持っている本来の強さを生かすことが出来ると言っています。さらに、江戸時代になると、部材の規格化とマニュアル化で建物が悪くなるのが進んだとも言っています。マニュアルが出来れば、自分の頭で考えることをしなくなり、まあまあの仕事は出来るようになるが、中世以前のような美しい木造建築物を建てられる大工はいなくなってしまうと嘆いています。現代に生きる技術者にとっては耳の痛い話です。

さて、20世紀の素材で作ったものは、100年後には何も残らないのではないとも言われています。長寿命の素材開発も進んでいるようですが、実用化は先のようです。そんな時代の我々がすぐに取り組むべきことは何でしょうか。



現代の我々は、医薬品や工業製品により、多く利便性を享受しています。人体から排出される医薬品や工業製品から排出される微量化学物質の処理は、下水道ではほどほどにし、利水者が利水量だけ必要なレベルまで処理するのが経済的であるとの論評も聞かれます。しかし、こうした論調はあまりにも人間中心の考え方ではないでしょうか？人間の利便性の追及の結果、水系に排出される医薬品や工業製品の微量化学物質が生態系の底辺を構成する微生物にとって脅威となることも考えられます。底辺の微生物の生存があっただけで地球上の生態系は成り立っています。その底辺を守ってこそ、人類の生存があるのではないのでしょうか。だとすれば、現在の人間社会での経済的尺度だけの判断は、議論の境界領域を区切った、あまりにも短期的な人間中心の議論と言えます。

古代の人々は、宗教的意味があったのかもしれませんが、自らの存在のため日常の生活のかなりの部分を犠牲にして、結果として美しいものを残しました。

現代の我々も、自らの存在のため、もっと広範囲な下水の高度処理に費用をかけ、生態系を育む水環境を残すべきと考えます。